

Voice of Handball

久保 弘毅

PROFILE 1971年生まれ。アナウンサー時代にハンドボール中継に携わり、8年連続でブレーオフ男子決勝を実況。その後フリーのスポーツライターとなり、ハンドボールやアマチュア野球などの取材を続けている。

Vol.170



個の成長。個の輝き

～2019年度の三重バイオレットアイリス～

同じ4位でも、内容が違う

残念ながら今年のブレーオフは中止になつたが、三重バイオレットアイリスは4年連続でブレーオフ進出を決めていた。4年連続4位とはいえ、今季の三重は見応えがあった。これまでとは明らかに内容が違う。

三重を率いてきた櫛田亮介監督が、兼務している日本代表のコーチでチームを離れることが多くなつた。そのため2019年度は梶原晃ビジネスマネージャーを監督にして、櫛田監督をチームマネージャー（以下、TM）にする変則的な体制になつた。代表活動を優先させるための一時的な措置であつて、チームの方向性が変わつたわけではない。梶原監督、櫛田TMとともにやりたいハンドボールは同じだから、選手の混乱もなかつた。それでも指揮官が変わると、変化が生まる。19年度の三重は、これまでにないくらい「個の成長」を感じられた。もちろん選手の育成は梶原監督と櫛田TMの共同作業であつて、どちらが優れてい

昨季同様に4位でシーズンを終えた三重バイオレットアイリスだが、チーム力は明らかな伸びを見せた。その要因は、梶原監督と櫛田TMによる「個の伸ばし方」にあつた。



櫛田チームマネージャーは代表活動を経て、分析力が高まっている

るといつ問題ではない。シーズンも女子の世界選手権があつた関係で、12月ながらまで各チームとも代表不在でトレーニングする時間が長かった。

イレギュラーな1年を上手に活用して、三重はチームの底上げに成功している。主力がグレードアップして、各ポジションで相手を上回る試合が多くなった。個人の「できること」が増えたので、見ていて楽しい。去年までの「なんとなくいいチーム」から、「いいチーム」と断言できるレベルになってきた。

「ホノカ」のポジション

今季の三重で最も伸びた選手はポストの近藤保乃佳だろう。ライン際を制圧できる力がつき、この1年で本当にポスト

高い身体能力で補おうとしたのである。前任者の角南が「玄人受けする「ポストらしいポスト」」だつたため、櫛田TMは近藤に配慮して「ポストらしい動きにこだわりすぎずに、保乃佳のよさを出してほしい」と伝えた。

近藤もあえて「オールラウンダー」と名乗り、ポストの既成概念にとらわれないようにしていた。しかしコートに立つと、ポストの動きができなくて、戸惑っていた。DFではハードに接触し、ルーズボールには、われ先に飛びつく。猛犬のようなプレースタイルが近藤の真骨頂なのに、OFでは「猫におびえる犬」のような状態が続いていた。なかなか本職のポストを獲得できなかつたこともあり、ポストは三重の泣きどころでもあつた。

ところが6年目を迎えた今季、近藤が急激にポストらしくなってきた。万谷由衣からのバウンドバスを「ゴールエリア内

で片手キャッチし、高

らしくなった。

近藤はカットインが得意なバックプレーがかかるため、当時監督だった櫛田TMは近藤を「ディフェンダーの地位を確立した近藤にした。「身体が強くて、ハードに当たられるんですよ」と、櫛田TMは近藤を抜擢した理由をつれしそうに話していた。

ディフェンダーの地位を確立した近藤を、櫛田TMは今度はポストに転向させた。クレバーな角南果帆がソニー・セミコンダクタマニユファクチャリングに移籍し、空席になったポジションを、近藤の

永製薬・現高知中央高監督)を彷彿とさせた。

近藤に聞くと、自信をついた理由は片手キヤツチではないといつ。

「片手キヤツチは、バックプレーイヤーが下のスペースにパスを落としてくれたから。私はシューートが課題だつたんですけど、最近は石立さんにつきつきりで教えてもらつて、GKをかわすシューートが打てるようになりました」

今季から三重に加わった石立真悠子は世界に通用するセンターで、理にかなつたハンドボールを言葉で伝えられる。年明けの日本リーグではケガのためにほとんど出場していないが、自身の個人スキルを惜しみなく仲間に伝えている。

1月の北國銀行戦で三重は5点差で敗

れたものの、北國のサイズのある3枚目の間から万谷がバウンドバスを通し、近藤が片手キヤツチする場面が何度かあつた。梶原監督は「保乃佳の片手キヤツチは大きかつたし、万谷のバウンドバスのクオリティーも上がりつきましたね。ピントでよく通してくれました」

で片手キヤツチし、高確率でシューートを決める。体勢がよくない時でもバックシューートでゴールにねじ込む。片手キヤツチで空間を支配する姿は、往年の名

ポスト・山口修(元湧永製薬・現高知中央高監督)を彷彿とさせた。



近藤のライン際での強さが増したこと、ポストが三重の強みになった

ヨンにしたい」

近藤はそう言って目を輝かせた。フランス男子代表のリュク・アバロは超人的な身体能力で、右サイドの枠に收まらないプレーをする。目の肥えた人たちが「あれはライトワインディングではなく『アバロ』のポジションだ」と表現する。近藤も從来のポストの枠を超えた「ホノカ」

のポジションをめざしている。

アバロは最初から独創的だったが、近藤はポストの定石を習得したことと、独創性を發揮する基盤を得た。多少時間はかかるが、櫛田TMの「既成概念にとらわれずに、保乃佳のよさを発揮してほしい」というせつくりしたオーダーに、近藤は答えを出そうとしている。

責任が人を育てる

競争の原理は大切だ。競争がないと、チームの空気がよどむ。しかし競争ばかりだと、選手の成長が遅れる場合もある。将来の柱に育てたい選手にはあえてポジションをさせて、失敗の中から学ぶことも大事になってくる。梶原監督は就任と同時に、3年目の林美里をセンターのレギュラーに抜擢した。



OFのすべてを任せられた林。コート上を支配する雰囲気が出てきた

林は打ててさばけるプレーメーカー。OFのすべてを任せられた林。コート上を支配する雰囲気が出てきた。林は自分から打ちにくくことで、周りを活かせるようになつたといつ。

「まずは自分がシュートを狙うこと意識しています。去年まではきれいに作るうど、バスで逃げることが多かつたけど、今年はシュート練習をしてきたので、自信を持つて打ち切れています。今までは相手からも『林勝負だ』と絶対言われていたし、打了される場面が多かつたんですけど、今は先手を取つて、相手が守れないところを狙えています」

「空いたスペースにああいつぶつに熊崎が入り込んでくれると、私もアシストしやすい。ハーフタイムに梶原さんから『後半にカズ（熊崎のコートネーム）を入れるから、そこから攻めを解決するよう自分で組み立てる』と言われました」

この日の林はミドルが好調で、前半だけ5/5と当たっていた。後半はオムロン（熊本）が林に高く当たつてくると予想された。そこで梶原監督はシュートの近藤の強さが増したこともあり、林得意な2対2がやりやすくなつた。ポストの近藤の強さが増したこともあり、林は真ん中の2対2から攻撃を上手に組み立てる。持ち前の打点の高いミドルだけでなく、時には大きな歩幅で2対2の外をスルスルと抜けていく。

2対2をやりながら、3人目が絡んでくるタイミングも逃さない。国体では新規の見方を作れたらよかつた」と反省

で、ボールをもらつ前の動きなどもつままで、三重でも「将来の司令塔」との期待が大きかった。しかしこ年目の昨季はシユートを吹かしまくるなど「らしくない」プレーが多かつた。大学時代のスーパースターが、日本リーグで控えに甘んじているうちに、いつの間にか控えらしくなるのはよくあること。伸びるタイミングを逃すと、逸材もただのベンチウォーマーになりかねない。そんなギリギリの一一番手に据えた。

昨年10月の時点では、梶原監督はこう宣

が間違つていなかつたことを証明した。普段の受け答えはちょっとフニャフニヤしているが、コート上でOFを統率する林の姿は凛として頼もしい。

林は自分から打ちにくことで、周りを活かせるようになつたといつ。

「まずは自分がシュートを狙ふことを意識しています。去年まではきれいに作るうど、バスで逃げることが多かつたけど、今年はシュート練習をしてきたので、自信を持つて打ち切れています。今までは相手からも『林勝負だ』と絶対言われていたし、打了される場面が多かつたんですけど、今は先手を取つて、相手が守れないところを狙えています」

「空いたスペースにああいつぶつに熊崎が入り込んでくれると、私もアシストしやすい。ハーフタイムに梶原さんから『後半にカズ（熊崎のコートネーム）を入れるから、そこから攻めを解決するよう自分で組み立てる』と言われました」

この日の林はミドルが好調で、前半だけ5/5と当たっていた。後半はオムロン（熊本）が林に高く当たつくると予想された。そこで梶原監督はシュートの近藤の強さを入れて、次の展開を作るよう、林にヒントを授けた。あくまでもヒントであつて、考えるのは林自身。この試合は後半に3枚目が高く出でてきたオムロンのDFを崩せずに、三重が敗れている。林は「もっとカズにロングを打たせる場面を作れたらよかつた」と反省



は自慢の速攻以外のプレーの質を高め、勝てる左サイドになりつつある

していた。

こういった成功と失敗を重ねながら、林は一人前の司令塔になりつつある。

「梶原さんは過程を見てくれるから」と、林は指揮官への信頼を口にする。

林のほかにもう1人、梶原監督は将来のチームの柱を育てた。2年目の左サイド・團玲伊奈だ。

團は1年目から多くの出場機会を得ていた。異次元の脚力を誇るスピードスターは速攻が得意で、チームのハイライト動画の常連でもある。だが不慣れな右サイドで出ることが多かつたせいか、セッティングでのシート確率は低かつた。貪欲に点を取りにくく姿勢は悪くないが、得点だけに固執しているようにも見えた。



河嶋はポストに7mスロワーなど新たな場所で、自分の課題に取り組む

現役時代にドイツ・ブンデスリーガ1部のTVエムズデットンで左サイドだつた梶原監督は、團に「チームを勝たせるサイドになろう」と、点を取る以外の仕事を伝えた。

やみくもに速攻に飛び出すのではなく、リバウンドに備える。サイドDFの重要性。声を出すこと――。

梶原監督の教えを吸収した團は、今年は内容のある声を出し、リバウンドもよく取る。点を取ること以外をがんばっていたら、一番の課題だったサイ

ドシューの精度まで上がってきた。立て続けにGKに阻まれたあとでも、冷静に自分を立て直している。シート率7割越えは一流のサイドプレイヤーの証。

シート率賞とベストセブンの2つのタイトルを獲得し、チームの顔に成長した。

林と團が一本立ちしたこと、三重はもう一つ上を狙えるチームになった。若い選手の伸びの勢いは、チームを押し上げ、ファンを熱狂させる。

梶原監督と櫛田TMは一人ひとりに合った課題を選手に課して、成長をつながれるなど、今までとは違った仕事場で課題を伝えた。

左サイドのレギュラーだった河嶋英里は、團の成長に押し出された格好だが、今季はポストを兼ねたり、7mTを任せられた。河嶋のもうひと伸びに期待する。

成長のきっかけを作りながらも、梶原監督と櫛田TMは細かいプランまでは示さないし、どなり散らしてまで選手を目的地に連れていこうとはしない。

ある日の梶原監督のツイッターに、こんな文章がアップされていた。

「Mマーの選手が凄いのは、怒られず、自分で考えろと言われ、何も言つてくれない（と感じる）指導者に対して、腐らず、自らと向き合つて、チームとして勝つ為に自らの役割を理解して、考えて行動できること」。

に取り組んでいる。もっと打てる選手がいるはずなのに、河嶋を7mT要員にする采配には驚かされたが、梶原監督には思惑があった。

「課題のシート力を上げるために、GKとの駆け引きを覚える意味でも7mTを打たせています。英里は全体が見え

ていて、相手のイヤなところを突けるし、DFはピカイチ。あとはシート力だけですから」



梶原監督での1年が、チームにとっていいアクセントになった

い選手はなかなか入つてこない。その代わり一芸に秀でた選手を育てて、その一芸を元にした駆け引きやゲームの全体像、さらには物の考え方を教え、個を強化していく。個人のよさを最大限に發揮させるのは、チームの基本理念もある。原石を光り輝かせるのは、最終的には自分自身。でもいろいろな人が磨くことで、今までになかった輝きを放つようになる。梶原監督、櫛田TM体制の2019年度は、三重バイオレットアイリスに新たな輝きをもたらした1年だった。